



MUSASHINO *for* TOMORROW

Vol. 139
Feb 2022

将棋と音楽

— 時代を超えるその普遍的物語(後編)

特別
対談

佐藤 天彦九段(将棋棋士 第74・75・76期名人)
福井 直昭(武蔵野音楽大学学長)

ごあいさつ

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長

福井 直敬



オミクロン株の急拡大が懸念される中、新しい年を迎えました。令和4年が、皆様にとりまして実り多い年となりますことを祈念申し上げます。

本学園では一昨年のコロナ感染症発生当初から、厳格な入構制限をするなど3密防止を徹底した上で、その折の状況に応じた独自の対応基準を定め、可能な限り対面授業を基本としつつ、一部遠隔授業を併用しながら指導を行ってまいりました。オーケストラ、アンサンブル、合唱等の授業についても、個々の間隔を拡げなければならないなど、さまざまな困難がありましたが、幸い新キャンパスでは、コンサートホールをはじめ練習環境も十分に整備されており、令和3年度に計画した全てのコンサートが立派に開催できたことは、学生・生徒諸君にとって大きな感動でした。加えて教職員、学生・生徒の皆さんが、感染者との接触、家庭内感染、発熱状況等を即刻申告してくれたことが、これまで学内での感染が極めて少なかった要因であると、深く感謝をしているところです。

さて、全ての大学は学校教育法によって、各7年以内に教学事項、管理・運営状況等活動全般にわたり、文部科学大臣の認証した評価機関による評価を受け、当該校の充実、向上に活かすよう定められています。本学は令和3年度がこの年にあたり、去る10月、今回は遠隔で評価が行われました。そのために、項目ごとの報告書の作成、またその内容に対する書面質問の回答には大変苦勞をしましたが、無事終了いたしました。この内容は現在評価機関が検討中で、結果はこの3月末までに文部科学大臣へ報告された後、他の受審校と共にホームページ上に公表されます。

先般、本学楽器博物館は空調設備が完備されたのを機に「楽器ミュージアム」と改称し、江古田新キャンパス内にリニューアル・オープンいたしました。本館は昭和28年、福井直弘元学長が学生の研究資料として、ドイツから1丁のヴィオラ・ダモーレを持ち帰ったことを契機として70年近くにわたり、時代を追っての歴史的楽器、少数民族の失われつつある楽器、美術工芸品としての美しい楽器、由緒ある楽器、楽器附属品等を蒐集してまいりました。加えて、550名を超える多くの篤志家の方々から楽器や資料のご寄贈を賜わり、所蔵資料は5,700点を超えるまでに大きく成長いたしました。所蔵資料の約45%はご寄贈いただいた楽器で、いかに多くの方々のご好意に支えられた蒐集であるかと、只々感謝の念を新たにしております。

新型コロナウイルス感染症の早期の収束が望めないところ、令和4年度が始まろうとしています。まずは教職員、学生・生徒の皆さんの健康維持を第一に考え、併せて計画をしている諸課題の具現化に一層の努力を傾注してまいります。今後とも皆様のご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

令和4年2月



将棋と音楽

時代を超える
その普遍的物語 (後編)

特別
対談

第74・75・76期名人

佐藤天彦 (棋士)

武蔵野音楽大学学長

福井直昭

対談前編(前号掲載)の10日後に、CS番組の収録のため東京・将棋会館で行われた佐藤天彦九段と福井直昭学長の対局は、解説の先崎 学九段が「凄い将棋。私が今まで観た中でも、二枚落ち史上屈指の熱戦でした!」とTwitter上で絶賛するほどの白熱したものでした。今回の後編では、その対局の振り返りを皮切りに、今や将棋界を席卷しているAIから、天彦九段の愛称「貴族」の由来でもあるファッションの話題まで、お二人が大いに語り尽くします。

いではプロの技を披露できたかなと(笑)。驚いたのは183手もの長手数。それも勝敗が最終盤まで分からない状態。私自身、大いに充実した時間でした。

福井 「棋は対話なり」——2時間近く先生と将棋盤を挟んで向き合って、その言葉が頭に浮かびました。本対談とは全く別の意味の、実に贅沢な「対話」でした。

天彦 福井先生にとっては経験されたことのない、いわばアウェイのシチュエーション。多少は緊張されていたかとお見受けしましたが、ただそれを、力を発揮する上でマイナスにな

「棋は対話なり」——緊張感を集中力に転換

福井 歴史を刻む将棋の総本山での解説や記録・読み上げまで付された本格的な対局。大変貴重な経験となりました。

天彦 いやあ、序盤から本当に完璧な指し手をされて、放送時間を余してすぐ終わってしまいそうになり(笑)。まさか、最初からこちらがあんなに時間を消費するとは想像していなかったんですけど(笑)。

福井 対局いただいた天彦先生に失礼がないよう、自分なりに研究を重ねました。

天彦 最善の粘りをしないと一気に潰されてしまうので、かなり力を入れて序盤は持ち堪え、中盤は捻り合い、終盤もお互い30秒将棋の熱気溢れる展開になりましたが、最後の競り合



○佐藤天彦九段(二枚落ち)vs福井直昭学長●指手183(於:東京・将棋会館)
左は、テレビドラマ化もされたベストセラー「うつ病九段」の著者としても知られる解説の先崎 学九段と、女王2期を誇る聞き手の上田初美女流四段

る動揺ではなく、むしろプラスになる没我の集中力に繋げているようで、印象に残りました。

福井 前は、仕事外の時間の重要性についてお話ししましたが、いや実際仕事以外でこんなに緊張する場面なんて滅多にない(笑)。今後の人生においても活きるような、得難い体験となりました。

天彦 そこまでの事を感じて下さって光栄です。私もまだまだ未熟とはいえ、10代、20代の時よりは棋士として勝負以外の役割・責任が増え、それ故に不安や緊張を感じることも出てきた気がするのですが、それだけに先生の緊張感を集中力に転換する力には刺激を受けました。もちろん、この辺りは分野は違えどプロとしての経験が大きい面でもあると思いますが…。

福井 駒を並べる段階で手が震えたので、頭の中まで震えて実際の指し手自体まで委縮しないよう奮励しました(笑)。

天彦 序盤は本当に完璧でした。どのプロにも異論はないと思います。しかし、いかに模様を良くできても、王様を詰ますという所まで辿り着かないといけなは、将棋の厳しさの一つですね。

福井 正直「いけるかも」と何回か思ったので、その度に浮かれる気持ちを抑えたのですが(笑)。棋士の方々は、幼少の頃から逆転の怖さを嫌というほど味わっていますよね。少しの有利を拡大し勝ちに繋げる。あるいは、不利な局面から何とか相手に間違えさせて逆転に持ち込む。一流棋士であっても、一つの勝利を得ることは容易ではない。「勝ち切ることが難しい」という言葉は、一層素直に私の胸に響くようになりました。天彦先生の洗礼を受けたお蔭です(笑)。人生の教訓にしたいと思います(笑)。

天彦 でも、あの対局場の充実感というか空気感は、勝ち負けとは別の次元で素晴らしいものだったと思います。あれだけ長く続いた熱気は、きっと視聴者にも伝わったのではないのでしょうか。

福井 負け惜しみではなく、序盤で押し切るより、終盤のあのスリリングな時間を先生と共有できた事は、本当に幸せでした。

仕事と趣味を刺激し合う

福井 天彦先生はメンズファッション誌の年間表彰で受賞されたほど、ファッションに一言をお持ちですが、お好きなベルギーのブランド「アン・ドゥムルメステール(以下、アン)」についてお願いします。

天彦 中近世ヨーロッパを思わせる装飾が適度に施されたデザインが特徴です。絢爛豪華なバロック、優美なロココ、どちらも私は美しいと感じていますが、当時のままのファッションは、現在の日本では勿論出来ない。だからこそ、それらの要素を上手く取り入れつつ色はモノトーンで纏めることで絶妙なバランスを保っている、アンに惹かれています。

福井 若い頃は、貯金を切り崩し電気が止められそうになるまで、アンに服に投資されたんですね(笑)。



天彦 でも、20代前半という多感な時期に、多少無理をしても感動させられるものを取り込んでおいて良かったです。

福井 先生は、もはやアンへの広告塔みたいなものですからね(笑)。現に、私も影響を受けて何アイテムか購入してしまいました(笑)。幻想的で官能的な世界観が気に入っています。ご自宅の豪華絢爛な家具については紙幅の都合で次の機会にと思いますが、先生は趣味の幅が実に広く、絵画教室に通われていたり、音楽理論(和声)も習われています。

天彦 基礎を知るだけでも、絵を観るときの感じ方や音楽の聴き方が変わりました。音楽も将棋も、それぞれ限られた数の音や駒たちが、セオリー・定跡に沿いながらもそこから逸脱していく様が似ていて、興味深いです。

福井 前回、ピアノを22歳から5年間習われていたと伺いましたが、なんとこのたび、私の下で再開いただくことと相成りました(笑)。

天彦 福井先生が、6年間ほぼ弾いていなかった私にどのように教えて下さるのか想像できなかったのですが、音楽の構造から来る必然に近い弾き方をしなければいけないような部分、反対に解釈の余地が幅広い部分など、本質的なところから教えて下さり楽しかったです。あとは、間近でお手本のフレーズを弾いて下さるので、純粋に迫力も感じました。聴く専門の私のようなファンにとっては、そのような距離で演奏を聴くことは普段ありませ



両人ともアン・ドゥムルメステールのアイテムを着用し、オーケストラの演奏会を鑑賞(於:東京芸術劇場 コンサートホール)



天彦九段ご自宅の豪華絢爛なイタリア製ソファ(撮影:天彦九段)。完成品が届くまで1年近くかかったという一品は、バロック的なデザインとロココ的な色味の融合



るので。思わず聴き入ってしまい、ご指導が耳に入っていない瞬間すらありました(笑)。

福井 お互いのプロの部分と趣味がクロスオーバーというか、刺激し合えれば良いですね。

天彦 技術を高めればもっと楽しく色々なことが教われると思うので、少しずつでも練習をしたいところなのですが、この辺りはプロ棋士生活とどう両立できるか、これから模索していきたいと思います。

“人間が楽しむ”ための将棋と音楽—— AI時代に打ち鳴らす警鐘

福井 「AIではない生身の人間同士が長時間に渡り困難に挑む姿に感動する」という前回の話の続きですが、実は棋士とAIの戦いは、2017年、棋界最高峰の名人であられた天彦先生が敗れた事で、いったん“終焉”を迎えました。

天彦 そういう時代がいずれ来ると考えていましたので、結果には淡々としていました。それに「人間とAIの強さは別物」という感覚が昔からありましたから。つまり、人間同士の勝負は、ただ盤上で能力を発揮し合うだけではない。必ずそこに至るまでのプロセスがある。強い相手と戦うことによるプレッシャーから委縮してしまって、勉強の意欲が減退することだである。「それじゃあダメだ」と自分の心と戦って、最終的に対局当日を迎えるわけです。

福井 音楽家と棋士に共通して必要な日々の練習・研究という孤独な作業、逃げ出さない姿勢ですね。

天彦 人間の強さというのは、他人との戦いは勿論ですが、自分自身との戦いによっても生まれ育っていくものだと思います。

福井 インドの格言にも「ひとは唯一の友としての自分と、唯一の敵としての自分を持つ」とありますからね。ところで、現在、将棋AIは棋士の研究面のみならず、ファンにとっても、もはや必須のツールです。対局中継では、その指し手ごとに両棋士が勝つ確率と、次に指すべき「候補手ベスト5」が表示されます。しかしAIによる候補手は、その後、対局者同士が最善手を完璧に指し続けたと仮定した場合ですね。そこには人間の経験則や恐怖心に基づくいわゆる実戦心理の他、疲労、残りの持ち時間等は加味されない。それは例えると、車のナビが提示する難しい最短経路、つまり現実にはこんな道走れないよ、という手…こんな理解で合っていますか？

天彦 合っています、合っています。狭い道で車を擦りながら進むような(笑)。

福井 それは走りたくないですね、と言いつつ、実は私はパーパードライバーなんです(笑)。

天彦 私も、免許すら持ってません(笑)。

福井 その分、洋服にお金を使ってるんですよね(笑)。それはさておき、棋士がAI候補手と違う手を指すと、コメント欄で厳しい声が飛ぶこともあります。天彦先生は、こうしたAIの判断が絶対視される現実について「“評価値ディストピア(暗黒郷)”に監視されている」と表現され、話題となりました。

天彦 一般社会にも起こりうる問題ではないかという思いもあって、冗談半分で表現してみました。将棋を科学的にAIの数値で解釈することは、人間が楽しむ上で有効な手段でしょう。確かに、棋士がAI候補手を指せなかった時は、純理論上、あるいは科学的な観点から、力不足と批判することも可能です。しかし、先ほど先生が挙げたような要素を思量すると、断崖絶壁を命綱なしで登るような、現実的に人間には指せない手も多いわけで、それはもう「非人間的、非現実的な批判である」という、相反する解釈も成立します。

福井 まして持ち時間がなくなった1分将棋でそれらを指し続けるなんて、綱渡りを走ってするようなものです(笑)。

天彦 観る側も、最善手を指すことがどれくらい難しいか分からないだけに、ソフトの点数を鵜呑みにせざるを得ず、「対局者が間違えた」という割と単線的な解釈になりやすい。

福井 科学による数値的な検証が、信奉され過ぎているということでしょうか。

天彦 そうなんです。解釈のグラデーションというか、将棋の技術を超越した精神面も含め、同じ環境条件下で自分もできるか、というような想像力が欠如してしまいがちです。音楽と同様、そもそも将棋は、「人間が楽しむ」ためとか「人間が幸せになる」ために存在しているはずで、観ている側も人間、やっている側も人間なわけですから、チャンネルがAIの視点のみでは、実に勿体ない。

福井 将棋も演奏も、ミスだけを強調されては辛い。こんな時代こそ、AI候補手と棋士の感覚の乖離を埋めるための解説者の力量が問われるのでしょうか。

天彦 はい。そうした価値観を持っている人間としては、棋士は色々な心理的グラデーションの中でその選択をし、その結果ミスする事もある、ということ伝えていかなければと思います。

福井 人類とAIの戦いを“終焉”させた当事者としての責任も意識して、ですかね(笑)。一ファンからすると、棋士とAIが「共存」することで、AIが拮げた盤上の可能性、そして難解な局面における「謎解き」の面白さを伝えていただければと思います。

将棋と音楽における真理の探究

福井 現代のトップ棋士というのは、たとえタイトルを全制覇したとしても、より強く進化し続けるAIが存在するがゆえに、研究競争が激化し、ゴールのないマラソンをさせられてい



羽生善治竜王(当時)を破り、名人3連覇に王手をかけた第76期名人戦七番勝負 第5局(2018年 5月30日 於:名古屋市「万松寺」)。着用したボルドーの羽織は、和装にもこだわりを持つ天彦九段のお気に入りの一枚。

るようで、本当に大変そうだなと思います。しかし、ここに私はクラシック音楽と将棋の共通性があると考えています。

天彦 と申しますと？

福井 最近先生ともよくご一緒させていただいていますが、クラシック演奏会のプログラムを見れば明らかなように、失礼を承知で言うと、現代作曲家は、歴史に名を残す大作曲家たちを超えることはできていない。このIT全盛の時代において、こういった過去を凌駕できないような分野は稀有だと思います。言い方を変えれば、時の流れに淘汰されずに残ってきた素晴らしい音楽は永遠に語り継がれるものであるが、その奇跡の恩恵にあずかれる作品は少ない。そしてそれらを学ぶのは決して簡単なことではない。したがって私は、学生諸君に「偉大な作品の真理」に少しでも近づき、そこに少しでも触れた時の幸福感・喜びを感じるために、努力を重ねてほしいと話しています。同様に、いかにAIが強くて、将棋を完全に解明したわけではない…必勝法があるわけではないですよね。それだけ人間が創った将棋は底が見えない奥が深いゲームゆえ、これも失礼な表現になるかもしれませんが、もし棋士の方たちが頭を垂れるとすれば、それはAIにではなく、将棋というゲームの存在に対してなのかなと。

天彦 それゆえに棋士は対局を通し、将棋の真理・深淵を探究しています。

福井 演奏家たちが、畏敬の念を抱いて大作曲家の作品に立ち向かうようにですね。

天彦 しかし「唯一の」真理ではなく、それぞれがそれぞれの方法で主観的にそれを追い求め、異なる将棋観をぶつけ合う。それが将棋の魅力なのかなと。

福井 創造性や個性を持った人間によって創られ、プレイされる将棋や音楽の魅力は普遍ということですね。

さまざまな価値観の吸収——〈和〉のころ

福井 将棋の進化は情報革命と密接に結びついていますが、インターネット等を駆使して世界中からあらゆる情報を入手

できる時代だからこそ、常日頃、何が正しいかを見極める取捨選択の力が大事ですね。

天彦 情報の流入量が多い反面、検索して得た情報がそのまま知識になっているような錯覚に陥りやすいと感じます。将棋の場合は、勉強する量が多いためAIの点数をつけた手に対して、つい思考を飛ばして「ああ、こうなんだ」と、浅薄な理解のまま納得してしまいがちです。情報の洪水の中で思考過程を空虚にせず、常に深層を探るような意識づけをしておくことが肝要だと思います。

福井 人間関係においても、似たような注意をされていますか？

天彦 「自分とは全然違うけど、この人にとっては、これが正解なのかもしれない。とりあえず決めつけずに、判断を留保しておこうか」という姿勢ですかね。確固たる価値観や感覚を持つのは決して悪いことではありません。それは個性でもあります。ただし、それに捉われすぎてもいけない。さまざまな価値観・可能性を吸収するという作業を日々意識的に積み重ねていけば、将棋の盤面も柔らかい頭と新鮮な気持ちで見られるようになるはずですよ。

福井 多様性が尊重される現代社会こそ、自分の人生を貫く考え方、すなわちアイデンティティーを確立していくことと同時に、他人の個性や価値観も尊重し、受け入れる努力や包容力、またそこから学ぶ謙虚な心も必要だと思います。この寛容な姿勢こそ、「個々人の自立」と表裏一体となって捉えられるべき本学の建学の精神「〈和〉のころ」とであると、私は考えています。

モノクロームな奨励会時代

福井 天彦先生は、なぜ孤独で苦しい戦いを続けられるのでしょうか？

天彦 おそらく幼い頃から盤上で競っていること自体が、人生観や物事の捉え方に大きな影響を与えているからでしょうか。

福井 プロ棋士になるためには、奨励会という養成機関に入る必要があります。全国の天才たちが難関試験をくぐり抜け、小学校高学年くらいで入会し、プロである四段を目指していくわけですが、21歳までに初段、26歳までに四段になれなかった場合は退会となるため、約8割が脱落する実に厳しい世界です。

天彦 会に身を置く時期は、青春であると同時に、まさに進学や就職に関わってくる年代です。普通の若者は誕生日が来るとハッピーな気持ちになるのですが、奨励会員は違います。「ああ、また年齢制限に一歩近づいた」と、苦しい気持ちになるのです。奨励会に入るという事は、まさに人生を賭けるほどの覚悟を要するのです。正直私にとって奨励会時代は、色に例えるとモノトーンです。

福井 正にアン・ドゥムルメステールのメインカラーじゃないですか(笑)。

天彦 ははは(笑)。ただそんな背景もあって、私は今でも時折、奨励会時代の事を思い出し、棋士になることができた重みを

改めて感じる場合があります。

福井 そういった痛切な勝負を小学生から続けているのですから、強靱な精神力が養われ、特別な人生観・価値観が確立されると想像します。

天彦 「悔しい」というのは、比較的余裕がある感情だと思のです。例えば今の私はプロになっているので、悔しさも将棋の醍醐味の一部、将棋を戦う上で自然に起きてくる感情です。でも奨励会時代の私は、自分が負けると悔しいどころではなくて、人生が本当に閉ざされるかもしれないという切羽詰まった状況でした。自分は勿論、親もリスクを負っている。勝っても楽しさや喜びを感じた事はほとんど無かったどころか、悔しさを感じている余裕すらなかったのです。

福井 奨励会を辞めようと思ったことが一度だけあるとか。

天彦 中学1、2年の頃です。周りを見渡してみると当たり前ですが、学校の友人は勝負の世界には生きていません。一方、私は朝5時に起きて2時間以上棋譜並べをし、授業中も将棋の本を読み、放課後も真っ直ぐ帰宅して詰将棋を解く。学校を休んでは対局をし、週末も将棋の勉強。基本的に友だちと遊ぶことはありません。それに奨励会で負かされて、日常的に辛い思いもしている。周りとのあまりの差から、ふと普通の日常もいかもしれないと思い、ある朝「奨励会を辞めようかな」と親に話しました。すると不思議なもので、学校に行くこと「やっぱり辞めたくない」という気持ちが沸々と湧いてくる。辞めた時のことを具体的に想像すると、ぼっかりと人生に穴が空いてしまうような喪失感がありました。やっぱり私は勝負の世界で生きてみたかった。結局、「やっぱり続ける」と撤回しました。

福井 当時の感情を突き詰めて考えると、やっぱり純粋に将棋が好きだった、という一言に尽きるのでしょうかね。

天彦 私は痛い負けを喫した時も、将棋を嫌いになった事はありません。それは将棋を仕事にしている今も同じです。なぜかという、負けて悪いのは将棋ではなくて、自分自身だからです。よく好きな事を仕事にすると、それが嫌になってしまうことがあると聞きます。私も当然楽しい事だけではありませんが、すべてが自分の責任で行っていること。それを将棋のせいにする訳にはいきませんし、したくもありません。

プロとして生きるということ—— 「人間形成」の必要性

福井 本学は、教育方針として「音楽芸術の研鑽」と共に「人間形成」を掲げています。重なる部分として、天彦先生は著書の中で、「倒した相手から『どうしてあんな奴に負けたんだ』と思われぬよう普段から言動に気をつけ、逆に『ああ、あいつに負けたのなら仕方ない』そう思ってもらえるような人間になることを目指す」と説かれています。

天彦 プロになれる人間は極々わずかです。そもそも環境に恵まれなかったり、将棋に出会うのが遅かったり等の理由で、プロを目指すための努力すらできなかった人もいます。

つまり、プロであるということは、そうした多くの方々からも見られているということです。自分という人間にも限界があるし、今までもこれからも色々なところで醜態を晒すことがあると思いますが、自分は努力できるという前提の部分で恵まれているんだという事を、常に忘れないようにしています。

福井 将棋の年齢制限のような厳しいものはないにせよ、一つのことを幼いころから突き詰めているという点で、音大生は共通しています。そうした中、各々悩みを抱えているんですが、最後に先生からメッセージをいただけますか。

天彦 私も奨励会時代、本当にプロになれるかなれないかの瀬戸際のところで戦っていました。そんな明るい色彩で彩られない時代も、今振り返ると、そこで得た技術、培った人間関係はものすごく大きい。たとえ練習練習の辛い毎日だとしても、それは後々には非常に豊かな時間であったと思える、そう信じて過ごして欲しいな。「山あり谷ありの起伏があったほうが面白い」くらいに考えて、自分の人生を映画や小説のように一つの物語として捉えれば、辛い事があっても乗り越えて結果が出せると思います。

福井 人生を俯瞰する視点を持つということですね。対談の前編・後編を通し、お互いの共通した趣味の話題を語らいながら、棋士・佐藤天彦にとどまらず、人間・佐藤天彦を知り、「将棋と音楽の普遍的物語」を紡ぐことが出来ました。心より感謝申し上げます。



渡辺明名人・棋王・王将(左)と将棋連盟フットサル部の活動で

天彦「運動不足になりがちです(笑)、棋界関係者ともプライベートで会う機会が少なくなっているため、良い気晴らしになる楽しい会です」
福井「将棋は『知の格闘技』とも言われますが、明るく知性溢れる棋士の方たちとのフットサルは、まさに異種格闘技(笑)。将棋の魅力に対する理解が一層深まります」

佐藤天彦 Amahiko Sato

1988年福岡県生まれ。中田功門下として1998年に奨励会入会。2006年プロ入り。2008年第39期新人王戦で棋戦初優勝。2011年同棋戦で2度目の優勝。2016年第74期名人戦にて羽生善治氏を破り、史上4番目の若さで名人位を獲得、九段昇段、以後3期連続名人位。2016年第2期叡王戦優勝、2018年第26期銀河戦優勝。将棋大賞は2015年度に最多勝利賞・最多対局賞・連勝賞・名局賞・敢闘賞の五部門を獲得。2016年度には最優秀棋士賞を受賞。クラシック音楽、ファッション、ヨーロッパの文化等に造詣が深く、「貴族」の愛称を持つ。

働く人々

武蔵野で



武蔵野音楽学園では、生徒・学生の皆さんが高度かつ充実した教育が受けられるよう、また安全で快適な学園生活が送れるよう、教員以外にも様々な部署でたくさんの人々が働いています。前号につづき、今回は6つのセクションをご案内します。

理事長 学長室

理事長、学長は、学園・大学のそれぞれ経営面、教学面における責任を果たすほか、学外団体の職務、さらに学長は教授としてほぼ毎日レッスンも担当されています。当室では、多忙を極める両先生が円滑に業務を遂行するために2名の職員によって秘書業務を行っています。業務内容を例示すると、スケジュール管理、学内外関係者との連絡調整、来客対応、車両調整、執筆原稿の校正・締切管理、社交文書（慶弔電報、お礼状等）の作成発送、資料等の整理保管、外国人教授の招聘業務などがあげられます。

理事長・学長が関わる方々の専門分野は多岐にわたり、また業務の特性上、臨機応変な対応を求められる場面も多く、常に緊張を伴います。しかしながら、要務をされている両先生のお姿を間近に拝見し、また関わる一流の方々のお人柄を垣間見ることができるとは、業務における貴重な学びの機会であるだけでなく、人としての得難い体験であり、日々充実感を持って業務にあたっています。生徒・学生の皆さんとは直接関わることは少ないですが、陰ながら皆さんの活躍を願っています。



広報室



当室は、5名の職員で学園の広報活動に関わる業務を担当しています。主な業務は、大学・高校・幼稚園の案内パンフレット・ウェブサイト・学園広報誌（本誌）の作成、音楽雑誌や受験情報誌、駅看板や新聞など各メディアへの広告掲載の対応と原稿作成、イベント参加者・資料発送者のデータ管理と発送、さらに演奏会や学生募集に関わるイベントの写真・映像の撮影と整理、映画やドラマなどの撮影協力の対応などがあります。

膨大な量の写真や映像は、学園の歴史を刻む貴重なもので、よい状態で残せるようアーカイブしています。近年増えてきた撮影協力は、本学のPRにつながる機会と捉え、宣伝効果を視点にいれながら対応しています。映画「蜜蜂と遠雷」のロケ地協力で話題になったことは記憶に新しいですね。またパンフレット等の作成では、学生、卒業生、教員の方に「武蔵野の顔」としてご協力いただいておりますが、登場してくれた皆さんから、母校を誇りに思っている様子が伺えると、大変嬉しく誌面作りにも一層熱がこもります。さらに学園の広報誌では、著名人からの寄稿やインタビュー、卒業生の活躍、学園行事の紹介など幅広い角度から武蔵野を紹介しています。

これからも、大学、附属高等学校・幼稚園・音楽教室など学園全体の部署との連携を図り、武蔵野の情報発信部署として、時代に即した広報活動ができるよう貢献していきたいと思っています。



入学センター

音楽大学進学を検討している方々に、本学の情報・魅力を伝えるべく、6名のスタッフで日々思考を巡らせながら業務に邁進しています。具体的には、オープンキャンパスや受験講習会など、学生募集に関わるイベントの企画・運営、進学フェアや高等学校で実施される進路ガイダンスへの参加、高校訪問、公式SNSの発信などです。業務上、主に関わりがあるのは、受験生や学校教諭、指導者の方々ですが、入学センターのスタッフだけではイベントを実施することはできません。レッスンや授業を担当していただく先生方との連携は不可欠で、先生方、スタッフ、時には学生の皆さんと受験生に関わる情報を共有しながら、本学入学に向けてサポートをしています。

講習会等に参加していた高校生が、本学に入学し、活き活きとキャンパスライフを送る姿を見ると、とても嬉しく思います。これからの、受験生が必要とする情報を随時提供できるよう、オンラインも活用しながら学生募集活動に取り組んでいきたいと思います。

「オープンキャンパス」や全国各地で開催される「学校説明会&体験レッスン」は、受験生のみならず、指導者や本学卒業生の方もご参加いただけます。本誌読者の皆さまにイベントでお会いできますことを、一同願っています。



楽器ミュージアム課



4名のスタッフは、各自が鍵盤楽器、弦楽器、管楽器、邦楽器とそれぞれ専門分野を持っており、その知識をいかしながら楽器ミュージアムの5,700点を超える資料を管理・運用しています。業務は資料の収集、整理、保管、展示、見学者への対応、教育普及活動、所蔵楽器の調査研究、販売物の製作など一般的な博物館員の仕事と同じです。

昨年12月に「楽器ミュージアム」がリニューアルオープンしましたが、それまでは入間から江古田への展示資料の移動、資料の展示、新パンフレットの作成などの開館準備作業が中心の業務でした。見学を受け入れは、現在は学内関係者に制限していますが、いよいよ今年4月から学外者の受け入れが始まり、本格的な開館業務が開始される予定です。また、新展示室や入間収蔵庫の良好な環境の保持や楽器の点検も重要な仕事です。さらに、毎年実施されている本学学芸員課程履修者の実習も引き続き実施していきます。

楽器は単に音を出す道具というだけでなく、それを演奏した人や製作した人の心が宿っています。私たちは武蔵野音楽大学の誇る楽器ミュージアムのメンバーとして、ミュージアムを通して楽器文化の普及に取り組んでいきたいと思っています。



附属機関

本学園附属の高等学校、幼稚園、音楽教室にも事務職員が在職し、学園に集う生徒、園児たちの教育を多方面からサポートしています。

【附属高等学校】

事務職員1名が勤務しており、主な業務は、生徒の給付金に関する事務、広報・入試関係業務、関係機関との連絡のほか、学寮での寮生支援、学校行事・イベント業務の一部を担当し、先生方と協働しています。また事務室には、日常的に生徒が質問や相談のため先生を訪ねて来ますが、教員と生徒をつなぐことも重要な役目だと感じています。さまざまな業務において状況に応じた対応を心がけ、高校生の皆さんの支援をしていきたいと思っています。

【附属音楽教室】

江古田キャンパス・入間キャンパス・バルナソス多摩の3箇所で開催しています。各教室に各2名の職員が勤務し、講師の先生方や生徒たち、保護者の皆さまとコミュニケーションをとりながら職務にあたっています。

業務内容として、入室試験、実技試験、体験教室、在室生や講師によるコンサート等の行事の運営、資料作成、広報活動等があげられま



す。4歳から18歳まで幅広い学年の生徒が在室していますので、個々の精神面にも気を配り、生徒たちの成長に合わせた手助けが出来るよう、日々心がけています。

【附属武蔵野幼稚園】

入間キャンパス内にあり、事務職員が1名勤務しています。主な業務内容は、行政・役所への書類作成、公文書処理、園全体の広報に関すること、行事の計画や準備など一般事務作業の他、日常の保育活動のサポートも含め通園バスの添乗、保育補助などです。さまざまな行事や保育を通して見られる子どもたちの成長には、全職員が一丸となり物事を計画し作り上げていく過程が欠かせません。園児や保護者の皆さまが安心して楽しく豊かな園生活を送れるよう、心地よい環境を整えていくことに努めています。



同窓会室



昭和6年に発足した武蔵野音楽大学同窓会は、長い歴史を大学とともに歩み、現在は全国各地府県49支部と海外に3支部を有しています。当室では、全ての支部の統括を担う本部事務局として事務局長と2名の職員が勤務し、全卒業生約46,300人のデータ管理、支部活動のサポート、新人演奏会の開催、会報の発行等、母校と支部との連携を深めながら、多岐にわたり卒業生の皆さんの活動を支える業務を行っています。

近年では、同窓会活動に在学生在が積極的に参加することも増え、支部の発展に大きく貢献しています。私たちは、同窓会の充実が母校の躍進を支える重要な礎の一つであると考えています。時を経ても「(和)のこころ」でつながる本学の同窓生として、卒業生はもちろん在学生の皆さんも大いに同窓会を活用し、活躍の幅を広げてくれることを願っています。キャンパスにお越しの際は、ぜひ同窓会室をお訪ねください。



「楽器ミュージアム」江古田キャンパスにオープン！ ～4月より一般公開される館内の見どころをご紹介します～

12月1日、駐日ハンガリー国パラノビチ・ノルバート特命全権大使をお迎えし、また、楽器ミュージアムのリニューアルにご尽力くださった方など、約60名がご臨席くださる中、江古田キャンパスにおいて「武蔵野音楽大学楽器ミュージアム」のオープニングセレモニーが開催されました。

現在は新型コロナウイルス感染症の拡大を防ぐため、学内の入構者を制限している関係で、公開は本学園学生・生徒及び教職員に限らせていただいております。同窓生をはじめとする一般の方への公開は今年4月を予定しておりますが、当面の間は完全予約制となりますので、詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。

皆さまのお越しを心からお待ちしております。



■わが国最大規模を誇る多様なコレクション

武蔵野音楽大学楽器ミュージアムは、わが国初の楽器博物館として、60年以上の長い歴史をもちます。西洋の歴史的楽器、日本の伝統楽器のほか、世界各地の民族楽器など、その所蔵資料は5,700点を超え、わが国最大規模を誇りま

す。また、楽器のみならず、指揮棒やマレットのコレクションのほか、オルゴールや演奏人形、楽器演奏写真や絵画など、音楽に関わる資料の多様さは、所蔵数の多さと並ぶもう一つの大きな特徴であると言えます。

■楽器の魅力を最大限に引き出す展示の工夫

所蔵するコレクションを、最大限に活かせる新たな展示空間づくりを目指し、大学新キャンパスの一環として、プロジェクトを立ち上げたのが今から9年前、ミュージアムの具体的な展示構想の検討段階に入ったのは7年前のことでした。以来、大学全体の新キャンパスプロジェクトとは別に、博物館分科会として、業者の方々とは60回以上の打合せを重ねて、この新しい展示空間が実現しました。

楽器というものは、わずか数センチ程度の小さなものから、数メートルに至るダイナミックなものまであります。また、使われている素材も木材、金属、象牙から、ガラス、陶器、骨、角、貝、皮、石、絹、和紙…とさまざまで、形状も千差万別です。中には、管が複数に分割されたり、容易にパーツが外れたり、経年により劣化している繊細なものも少なくありません。これらの多様な資料すべてについて、適切にかつ安全に、そして美しく展示する必要があります。

このため、使用する治具やケースなどは、既成のものではなく、これまで楽器博物館の現場で培ってきた経験を活かして、汎用性のある独自の形状を考案しました。このオリジナルの治具や展示ケースによって、歴史的楽器を立体的に美しく、安全に見せています。それぞれの楽器が持つ魅力が、展示から少しでも感じていただけたら嬉しく思います。

では、館内はどのような展示で構成されているのか、紙面の許す限り、楽器ミュージアムの館内を皆さまにご紹介します。

楽器ミュージアムのエントランスを入り、ミュージアム中ほどにある円形のニュートラルな空間からは、「鍵盤楽器展示室」「管弦打楽器展示室」「日本の楽器展示室」「世界の民族楽器展示室」という4つの異なる楽器の世界にアプローチすることができます。



鍵盤楽器展示室

「鍵盤楽器展示室」では、ピアノが誕生する以前から存在しているチェンバロやクラヴィコードなどから始まり、モーツァルトの時代の初期のピアノ、その後、19世紀に入り飛躍的に発展したグランドピアノなど、ピアノの歴史について体系的に知ることができます。また、中産階級の台頭によって、ピアノが一部の上流階級層から市民に広く普及したことで、家庭用のさまざまなピアノが作られるようになり、さらなる発展を遂げましたが、そのような多様な形状のピアノもご覧いただくことができます。その他、パイプオルガンやリードオルガンなどもご覧いただけます。

さらに、グランドピアノのある展示室壁面には、Ira Jean Belmont氏(1885-1964)による音楽絵画が配置され、深い青を基調とした室内がより格調高く演出されています。同氏は音楽の印象を絵画で表現する“Color-Music Expressions”という、いわば、音楽と絵画の融合を目指して独自の分野を開いた人物として知られています。因みに右の写真は、ベートーヴェン作曲「交響曲第7番」というテーマで描かれた作品です。

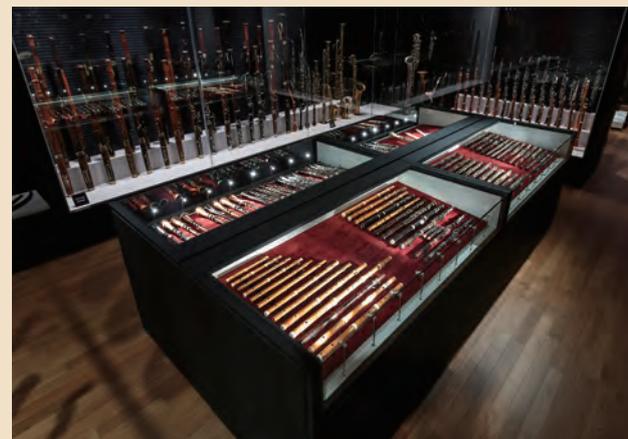


管弦打楽器展示室

「管弦打楽器展示室」では、ヨーロッパの管弦打楽器の歴史の変遷をたどれるよう資料を展観しています。弦楽器では、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの銘器のほか、変形弦楽器や古楽弦楽器、ハープやギター、マンドリンなどがご覧になれます。木管楽器は、フルート、クラリネット、オーボエ、ファゴットの各楽器の体系的

コレクションを中心に、サクソフォーンの考案者であるアドルフ・サククス自身が製作したオリジナル楽器なども見ることができます。

さらに奥に進みますと、金管楽器が、種類別、年代別に展示されています。特に、19世紀初期以降のヨーロッパで発展をみせた軍楽隊の低音楽器コレクションは、ドラゴンを模ったベルをもつバソンリュスなど、視覚的にもユニークな形状が目をはきまします。また、打楽器としては20世紀におけるコンサートマリンバの発展がわかるコレクションなどがあります。



日本の楽器展示室

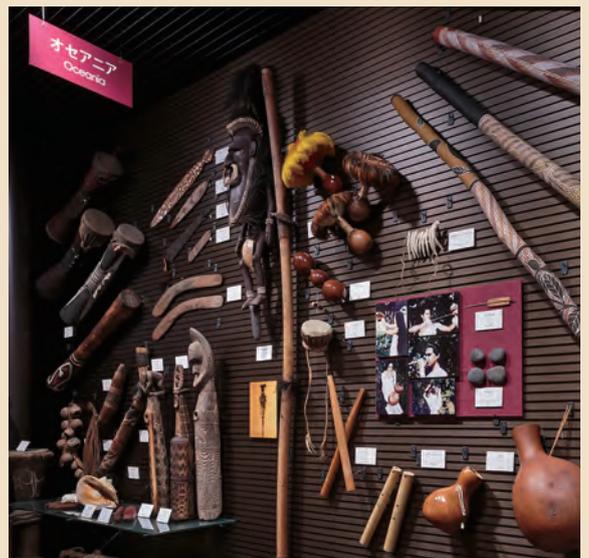
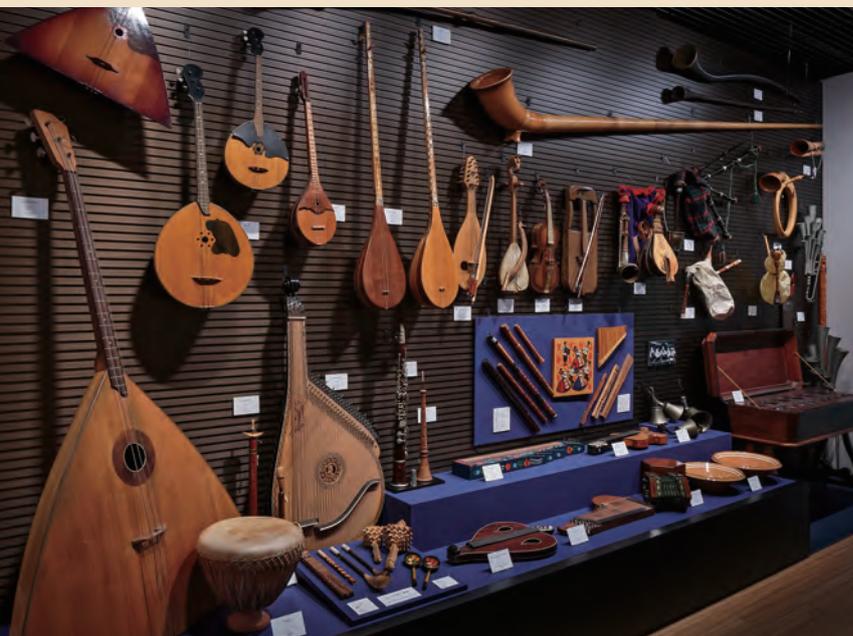
「日本の楽器展示室」で、先ず私たちの目に飛び込むのは、展示室正面に設けられた大きな松羽目の舞台でしょう。これは、歌舞伎の舞台を再現した展示で、演奏時の楽器の並び順を示しています。この他、雅楽、琵琶楽、尺八といった各種伝統音楽の楽器が種類別に展示されています。

展示室奥には、邦楽器研究家である水野佐平氏楽器コレクションがあります。歴史的な箏を中心に、仙台藩伊達家の宝物であった平安から鎌倉期の作と推定される笙や、井伊家伝来の古楽器コレクション、石村近江製作の三味線など、歴史的に価値の高い銘器をご堪能いただけます。



世界の民族楽器展示室

東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア・北アフリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オセアニアの8つの地域から成る「世界の民族楽器展示室」は、各地域をテーマカラーで色分けすることで、それぞれの地域色を展示空間からも感じていただけるように工夫しました。各地域の伝統楽器や、今では希少となりつつある少数民族の楽器など、急速な近代化によって失われつつある地域に古くから伝承されてきた楽器や音楽文化が、この展示空間にはたくさんあります。是非、ご覧いただき、各民族が大切にしてきた音楽文化や感性などを感じていただきたいと思います。また、楽器の傍らに添えられた楽器演奏人形や演奏写真、絵画などもきっと皆さまの理解の助けとなることでしょう。



福井理事長がハンガリー国より 功労勲章を受章

この度、本学園 福井直敬理事長は、ハンガリーの音楽芸術の紹介と促進活動、ならびに同国と日本の音楽機関との交流の構築と発展への貢献により、ハンガリー国大統領より「ハンガリー国騎士十字功労勲章」を授与され、12月1日、本学において駐日ハンガリー国パラノビチ・ノルバート特命全権大使より勲章が贈られました。



学生たちの熱演が光った 3つのコンサート

11月、学生によるコンサートが相次いで開催されました。

オーディションで選抜された学生による「オペラ選抜クラス試演会」(11月16日、ブラームスホール)は、一昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症対策をしながら開催されました。1年間の学修の成果としてW. A. モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》、G. プッチーニ《ラ・ボエーム》などから抜粋された場面を上演しました。①

プロの演奏家を育てる、演奏学科ヴィルトゥオーゾコースから選抜された学生による「ニュー・ストーリーム・コンサート44 ～ヴィルトゥオーゾコース演奏会～」(11月18日、トッパンホール)では、出演した学生それぞれが、魅力ある持ち味を存分に発揮し、素晴らしい演奏を披露しました。②

音楽総合学科アートマネジメントコースによる企画制作公演



「Marimba Tonight ～音と光の躍動～」(11月25日、ブラームスホール)では、レクチャーを伴ったマリimbaを中心とした打楽器アンサンブルの演奏が、鮮やかな照明と共に繰り広げられました。企画制作からすべてを4年生が担当した完成度の高いステージに、大きな拍手が寄せられました。③



イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル

本学客員教授イリヤ・イーティン先生の2年ぶりのピアノ・リサイタルが、11月30日ベートーヴェンホールで開催され、ロシアの作曲家の作品に対する深い洞察が最高度のテクニックで披露されました。

前半のチャイコフスキーの《四季》全曲演奏では、最初の一音から温かく深い響きが聴衆の心を捉え、12ヶ月四季折々の情景が時には優しく、時にはエネルギッシュに、哀愁と豊かな抒情をもって弾き進められ、あたかもホール全体がロシアの風景になるかのようでした。

続く後半には、ムソルグスキーの組曲《展覧会の絵》が演奏され、それぞれの題名をもつ10曲とさまざまに変化していくプロムナードが、オーケストラを想わせる豊かな響きで限らない想像力とファンタジーをもって展開され、唯一無二の世界が描き出されました。イーティン教授の哲学的な瞑想性に聴衆は惹きつけ



られていき、万雷の拍手に応じて弾かれたアンコール、ラフマニノフ《音の絵》Op.39-5とモシュコフスキー《火花》で、会場は完全に一つとなっていました。

ピールマイヤー氏の指揮による 管弦楽団演奏会

本学管弦楽団演奏会が、12月2日東京芸術劇場コンサートホールにて開催されました。指揮者には、ベルリン・ドイツ交響楽団やライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団などヨーロッパを中心に多くの公演実績をもち、本学のドイツ演奏旅行でも指揮をされたルドルフ・ピールマイヤー氏を、5年ぶりに迎えました。

プログラムはブラームス「ハイドンの主題による変奏曲」、ラヴェル「バレエ音楽《ラ・ヴァルス》」、ブルックナー「交響曲第7番（ノヴァーク版）」はそれぞれ趣が異なり、高度な表現力が求められる難曲でしたが、同氏の熱心な指導のもと、これまでに培ってきたアンサンブル力が遺憾なく発揮されました。特に



1時間にも及ぶ大曲であるブルックナー「交響曲 第7番」では、抒情性豊かな作品が重厚なハーモニーで表現され、見事な演奏を聴かせてくれました。

コロナ禍にもかかわらず学内外から多くの方々にご来場いただき、会場からは学生たちの熱演に惜しみない拍手が送られました。

美しいハーモニーを披露した 室内合唱団演奏会

12月8日、本学室内合唱団演奏会（指揮：栗山文昭本学特任教授、片山みゆき本学講師）がベートーヴェンホールで開催されました。プログラムには、グレゴリオ聖歌、ルネサンス作品、モーツァルト、三善晃などによる多彩な作品が並び、出演者全員が抗原検査を行い、必要なディスタンスを保った上で、マスクをはずしての演奏となりました。練習では仲間の声が聴き取りづらく、ハーモニーを作るのに苦労をしましたが、全員が声に集中して耳を傾けることで、より緊張感のある素晴らしい音楽に仕上がりました。本学学生ならではの深みのある美しいハーモニーで聴衆を釘付けにしました。

プログラム最後の三善晃（編曲）《唱歌の四季》では、誰もがよ



く知る「朧月夜」「茶摘」「紅葉」「雪」「夕焼小焼」が、2台ピアノの流麗な伴奏と共に混声合唱の色彩豊かな響きで表現され、日本の四季の情景が浮かぶ味わい深い演奏に、会場は温かな雰囲気になりました。

迫力あるサウンドを響かせたウィンドアンサンブル演奏会

本学ウィンドアンサンブル演奏会が、元陸上自衛隊中央音楽隊隊長、武田 晃本学講師指揮の下、12月13日東京オペラシティコンサートホールにて開催されました。

前半は、P. クレストン「祝典序曲」で華やかに幕を開け、W. シューマン「ニュー・イングランド三部作」、A. リード「交響曲 第3番より ワグナーのボラツィの主題による変奏曲」の吹奏楽作品を、授業の集大成として発表しました。後半は、大曲D. マスランカ「交響曲 第8番」を演奏。変化に富んだ旋律やリズム、迫力のある重厚なサウンドを素晴らしいテクニックで披露し、多くの聴衆を魅了しました。客席からの大きな拍手に応え、アンコールにA. リード「アーデンの森のロザリンド」をしっかりと美しく演奏し、2021年演奏会シリーズの掉尾を飾りました。



本学合唱団、東京芸術劇場コンサートオペラに出演



© サラ・マクドナルド

1月8日に開催された、東京芸術劇場コンサートオペラVol.8 ビゼー：劇音楽「アルルの女」に本学合唱団が出演しました。このシリーズに本学合唱団が出演するのは、今回が3回目となります。指揮は、今年度4月から本学特任准教授に就任の佐藤正浩氏で、オリジナルの劇音楽として全曲を演奏会形式で上演しました。朗読で俳優の松重 豊氏も出演されるなど、横山修司本学講師の指導（ピアノ：谷川瑠美本学講師）のもと、この演奏会のために選抜された23名の合唱メンバーが、豪華出演者との共演を果たしました。

また、本演奏会のもう一つのプログラムである、プーランク：オペラ「人間の声」には、本学卒業生で世界でもトップレベルのソプラノの森谷真理さんが出演し、いずれも好評を博しました。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここに芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

学校法人 武蔵野音楽学園

同窓生

大坪亮子様 林 秀樹様 齋藤勲子様 鳥垣正子様 大久保優美子様

役員・教職員・一般・他

戸田史郎様 佐伯真弥子様

※ご芳名(五十音順)は、2021年9月1日から12月20日までに寄附いただいた方々です。

(他に匿名を希望される方7名)

それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきます。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、クレジットカード決済によりご寄附のお手続きができます。是非ご利用ください。

栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

名称	内容	氏名
ハンガリー国騎士十字功労勲章	ハンガリー国大統領より授与される	福井直敬(本学園理事長)
令和3年度三条市表彰(新潟県)	市民栄誉賞	佐藤英里(大学2年・作曲)
「映文連アワード2021」 (主催：公益社団法人映像文化製作者連盟)	作品「ぼくだけだれとおもう？」 (音楽制作担当)が文部科学大臣賞受賞	夏目 歩(2003年大学卒業・音楽教育)
フェリックス・メンデルスゾーン・ バルトルディ・コンクール2021(ベルリン)	ピアノトリオ部門 第1位	木林理絵(2014年修士修了・ピアノ)
第19回東京音楽コンクール	声楽部門 第3位	奥秋大樹(2018年修士修了・声楽)
第33回草加・日本国際ハーブコンクール2021	プロフェッショナル部門 第2位	原 日向子(2016年大学卒業・ハーブ)
第3回ラフマニノフ国際ピアノコンクール JAPAN	G部門 第3位、ロシア作品賞	吉原麻実(2021年修士修了・ピアノ)
第4回マルゲリータ・グリエルミ声楽コンクール	新進歌手部門 第3位	森田枝小莉(2020年修士修了・声楽)
第29回彩の国・埼玉ピアノコンクール	F部門 銅賞	佐藤陽十(修士2年・ピアノ)
2021 CARLES & SOFIA 国際ピアノコンクール (イタリア/オンライン)	Emergent (17~21歳)部門 GOLD HANDS、 ベストショパン賞	恒本優花(大学2年・ピアノ)
第41回全日本ジュニアクラシック音楽コンクール	声楽部門 大学生の部 第1位	長島有菜乃(大学4年・声楽)
第24回「長江杯」国際音楽コンクール	打楽器部門 大学の部 第1位、理事長賞	敦賀朝香(大学2年・打楽器)
第90回日本音楽コンクール	声楽部門(オペラ)本選会 入選	奥秋大樹(2018年修士修了・声楽)
第22回北関東ピアノコンクール	大学生Sの部 第1位、最優秀賞、朝日新聞社賞 大学生Sの部 第3位	久保田百美(大学4年・ピアノ) 木内伶奈(大学1年・ピアノ)
第19回北関東ピアノオーディション	ピアノソロ部門(専門Special部門)グランプリ、 群馬県知事賞	横地ちひろ(博士1年・打楽器)
第17回南関東ピアノオーディション	ピアノソロ部門(専門Special部門)グランプリ、 神奈川県知事賞	横地ちひろ(博士1年・打楽器)
第17回中津An die Musik ピアノコンクール	ソロ部門 自由曲の部 大学生コース 第3位	中嶋夏歩(大学3年・ピアノ)

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。掲載は順不同、敬称略、学年は受賞時のものです。

オープンキャンパス・学校説明会 & 体験レッスン

オープンキャンパス		
開催日	主な実施内容	会場
3月20日⑧	体験レッスン、ガイダンス	武蔵野音楽大学 江古田キャンパス
5月15日⑧	学生によるコンサート、体験授業	
6月19日⑧	キャンパスツアー、進学相談	

学校説明会 & 体験レッスン		
開催日	開催地	会場
5月22日⑧	新潟県新潟市	ヤマハミュージックリテイリング 新潟店 ミュージックアベニュー新潟
5月22日⑧	静岡県静岡市	すみやグッディ SBS 通り店
5月28日④	福岡県福岡市	アクロス福岡 イベントホール
5月29日⑧	茨城県水戸市	水戸センター ヤマハミュージック
6月 4日④	長野県長野市	長野市芸術館 リサイタルホール
6月 5日⑧	神奈川県横浜市	ミュージックアベニュー横浜
6月12日⑧	福島県郡山市	ヤマハミュージック 郡山店
6月12日⑧	千葉県千葉市	ヤマハミュージックリテイリング 千葉店 千葉センター
6月26日⑧	北海道札幌市	ガイダンス会場：六花亭札幌本店きたこぼしホール レッスン会場：ヤマハ札幌センター
6月26日⑧	宮城県仙台市	仙台中央音楽センター IVY HALL

※事前申し込みが必要です。詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。

※7月以降も「オープンキャンパス」《学校説明会 & 体験レッスン》を開催します。

【お問合せ】 武蔵野音楽大学 入学センター TEL.03-3992-2500

E-mail : nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

2022年 春期受験講習会

講習会名	日程	申込期間
大学受験講習会	3月25日⑨～3月27日⑩	1月24日⑧～
高校受験講習会	3月26日⑨・3月27日⑩	3月14日⑧
会場		
武蔵野音楽大学 江古田キャンパス		

要項の請求について：春期受験講習会要項は、本学ウェブサイト内の「資料請求フォーム」からお申し込みいただくか、本学広報室へお電話にてご請求ください。(TEL.03-3992-1125)

本学ウェブサイト <https://www.musashino-music.ac.jp/>



編集後記

2号にわたってお届けした佐藤天彦九段と福井学長の対談。演奏にも対局にも人間性が表れるなど、音楽と将棋の共通点にふれる興味深いお話を聞かせていただきました。天彦九段は、自身の奨励会時代をモノクロームな時代と言い、振り返ってみれば、その頃の辛い時期こそが「非常に豊かな時間であった」とおっしゃいます。2022年を迎えても我慢の日々は続きそうですが、「艱難汝を玉にす」の言葉を信じて前向きに日々を過ごしていきましょう(編)。

Contents Vol.139 2022

- | | | |
|-------|--|--|
| 1 | ごあいさつ | 理事長 福井直敬 |
| <hr/> | | |
| 2 | 巻頭 特別対談 | 「将棋と音楽」—— 時代を超えるその普遍的物語（後編）
佐藤天彦九段×福井直昭学長 |
| <hr/> | | |
| 7 | 武蔵野で働く人々 | |
| <hr/> | | |
| 9 | 「楽器ミュージアム」江古田キャンパスにオープン！
～4月より一般公開される館内の見どころをご紹介～ | |
| <hr/> | | |
| 12 | Musashino News | 福井理事長がハンガリー国より功労勲章を受章
学生たちの熱演が光った3つのコンサート
イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル
ピールマイヤー氏の指揮による管弦楽団演奏会
美しいハーモニーを披露した室内合唱団演奏会
迫力あるサウンドを響かせたウィンドアンサンブル演奏会
本学合唱団、東京芸術劇場コンサートオペラに出演 |
| <hr/> | | |
| 14 | Campus Information | 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
オープンキャンパス・学校説明会&体験レッスン
2022年 春期受験講習会 |

表紙の写真

アトリウムになっているメインエントランスの上部に設置され、S棟とE棟をつないでいるブリッジ。シンメトリーになっているその造形はまるで美術館のように美しく、ガラスの壁は開放感に満ち溢れ、差し込む光がたくくりだす幾何学模様の影が幻想的な雰囲気を演出しています。



学校法人 **武蔵野音楽学園**

江古田キャンパス

〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1丁目 13-1
TEL. 03-3992-1121(代表)

入間キャンパス

〒358-8521 埼玉県入間市中神 728
TEL. 04-2932-2111(代表)

パルナソス多摩

〒206-0033 東京都多摩市落合 5-7-1
TEL. 042-389-0711(代表)

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

武蔵野音楽大学ウェブサイト <https://www.musashino-music.ac.jp/>